

近代中国の洋画作品データベースの構想と意義について

九州大学大学院人文科学研究院学術研究員 武 夢茹

発表者は、2021年8月30日～2024年3月まで、科学研究費助成事業の研究活動スタート支援における研究課題「近代中国に描かれた油彩画の悉皆調査—作品データベースの作成」(研究課題 21K19950)として、近代中国の洋画作品(油彩画・水彩画・グワッシュ・素描)を集約したデータベースを作成するプロジェクトに取り組んでいる。本発表では、この研究プロジェクトの着想に至った経緯や問題の所在、データベースの概要と進捗状況について報告する。さらに、近年の美術史分野におけるデータベースの事例を紹介した上で、本データベースがどのように活用されうるのかを提案したい。

発表者は修士課程より、近代中国の女性洋画家関紫蘭(1903～1985)に関する研究を行う過程で、中国近代洋画の現存作品が少ないことなどいくつかの問題に直面した。そもそも中国近代洋画史の研究は、1970年代末の改革開放政策の頃から本格的に始まり、中華民国期(1912～1949)の洋画壇の動向を叙述した通史書、美術学校や団体、画家に関するモノグラフや専論、そして制度論やジェンダー論、視覚文化などのニュー・アート・ヒストリー以降の多角的な観点を取り入れた研究がこれまでに行われてきた。加えて近年は、中華民国期の各年に起きた洋画界と関連のある政治社会文化的事象や、重要な文献を編纂した書籍も出版されている。このように中国近代洋画史を研究する者にとって、同時代の文献資料へのアクセスは格段に容易になった。だが一方で、これまでに中国国内で出版された書物や画集は、絵画作品の所蔵先などの基礎情報を記載していないものや、図版の出典を明記していないものが多く、作品の分析に根差した研究を行うための環境が整備されているとは言い難い。

そこで、中華民国期に中国の画家が制作した洋画作品の全体像を再構築するための一つの試みとして、発表者が取り組んでいるのが作品のデータベースをつくることである。これまでの研究期間では、中国近代洋画に関連する一次資料と二次資料を収集し、それらに掲載された絵画作品をスキャンしJPEGデータとして保存した。また、絵画作品の基礎情報(作者・作品名・技法・サイズ・制作年・出典・出品展覧会・所蔵先・来歴)をExcelファイルにまとめた。現時点でまとめた作品の総数は1039点である。来年度は、一次資料から絵画作品を収集することを継続的に行うとともに、作品の基礎情報をまとめたデータを九州大学学術情報リポジトリにおいて公開することを計画している。

最後に、メトロポリタン美術館のオープンアクセスをはじめ、昨今の美術史分野におけるデータベースの事例を紹介し、本作品データベースを中国近代洋画史研究で活用しうるものにするための今後の課題を提示する。